

尚古集成館

鹿児島県鹿児島市吉野町

鹿児島市に建つ「尚古集成館」の石積みアーチの玄関口を背に錦江湾をのぞむと、真正面に桜島が烟^{けぶ}って見えた。この石造建築は1851年、薩摩藩第11代藩主（島津家第28代当主）の島津斉彬^{なりあきら}が富国強兵・殖産興業を目的に推進した「集成館事業」の遺構である。

斉彬は事業推進のために40棟ほどの木造中心の工場群を建設し「集成館」と名付けた。1863年の薩英戦争で多大な被害を受け、1865年に再建された「洋式機械工場」が現在の尚古集成館の原形だ。周りの工場が順次解体されるなか、この石造りの機械工場だけが残し、1923年には島津家の歴史や文化を語り継ぐ博物館に改修された。古きを尊ぶという意味の「尚古」を冠し「尚古集成館」として今も多くの観光客が訪れる。

尚古集成館を構成する石は、桜島の噴火による溶結凝灰岩^{ようけつぎょうかいがん}（小野石^{おのいし}）。いわば桜島の「分身」だ。溶結凝灰岩が広く分布する鹿児島では古くから石を使った土木構造物や建築が多く、石造技術が発達してきた。尚古集成館はまさにその集大成ともいえる。石積みの構造で江戸時代から現代まで、桜島の噴火に伴う幾度もの地震に耐えてきたその技術の高さに驚かされる。窓の上部のアーチ型デザインの実現には高い加工技術が必要だ。細部の装飾にもみられる進取果敢な建築へのアプローチに、鹿児島の風土を強く実感させられた。

溶鉱炉、反射炉、産業革命に通じるガラス、紡績、蒸気機関などの一連の集成館事業を、錦江湾の彼方から見下ろしてきた桜島。日本人のものづくりの原点にもなった偉業とその舞台となった建物を、きっと誇らしく見届けてきたのであろう。



「一流の家は博物館を持つものだ」。島津家第30代忠重は、留学した英国で名家が博物館を所有しているのを見てそう考え、尚古集成館をつくった。島津家の物心両面の遺産を伝承する痕跡でもある石造の機械工場を改修、玄関口のアーチを増築し、看板を自ら揮毫した。



Material Stories

建設×史材

石

No.5